

— THE —
Olympic Golf Club
—



JULY 2000 VOL. 2

五嶋 「はじめまして。毎日お忙しいようですね」

釜本 「そうですね。今年になって予算委員会のメンバーになるなど役職が増えまして」

五嶋 「週末ごとに東京と大阪を往復され、国政だけでなくサッカー教室や講演会なども精力的にこなされているとか」

釜本 「土曜日、日曜日が多いんです。拘束時間は短いんですが、遠くまで行かなくてはならないので、わずか10分、15分くらいしかない会場でも5、6時間かけて往復するんです」

五嶋 「そりゃ、大変だ。でも、お見かけしたところ、若いころ（今でも若いですが）と全然変わりませんか。議員になられても体力は落ちませんか」

釜本 「いや、全然違いますね。かなり落ちました。ほかの議員さんの中にはジョギングをしたりする方もいらっしゃいますが、僕はグラウンドでしか体を動かしたことがなく、歩いたりジムに通ったりが出来ないんですよ。最近、かくのは汗でなく冷や汗ばかり（笑い）」



五嶋 「東京の議員会館、議員宿舎ではどんな生活ですか。単身ではご苦労も多いかと思います」

釜本 「議員宿舎に食堂がありますから。朝食べて、夜も8時半までやっているし。ま、外で食べる（会合）も多いし」

五嶋 「政治もなかなか大変な時期ですね。お体にお気をつけて。でも、釜本さんといえば、まずサッカーのことからお聞きしなければなりません。今年、シドニーでオリンピックが開かれますが、日本の代表チームは世界を相手にどこまで戦え



サッカー・政

釜本 邦茂



ますか。メダルは取れますか」

釜本「組み合わせでどういう対戦相手になるかによっても違うと思いますが、可能性は十分にあります。Jリーグが出来て7年。そのころ中学生だった選手がプロでもまれて力をつけていますから」

五嶋「そうすると、釜本さんがメキシコで取った銅以来のメダルチャンスが久々に来たということですか。あの時の感動を再びですね」

釜本「五輪は23歳以下で戦うんですが、この年代の評価は世界でも高いです」

五嶋「初の共催となる2002年のワールドカップ (W杯) 日韓大会も近付いてきました」

釜本「五輪メンバーの半分以上がW杯メンバーにも選ばれるでしょう。開催国としての特権ともいえる大勢の応援の中でできるわけですから、上位を狙うには有利です。大会まで精進して力をつけてもらいたいですね」

五嶋「サッカー選手だった釜本さんがゴルフを始められたのはいつごろですか」

釜本「早かったですよ。30前くらいかな。当時間もサッカーブームで、ある時、むしゃくしゃすることがあってヤンマーの先輩に気晴らしに行こうかと誘われまして。動いてないボールを打つなんて (簡単)、とそんな感じで始めたものですから今だに… (笑い)」

五嶋「私も学生時代、明治大学で野球やってたんですが、止まっているから打てるかということ、打てないもんですね。釜本さんはどんなゴルフをされるんですか? 聞けばすごいスライス球とか」

釜本「スライスじゃなく昔は軽いフェードだったんです (笑い)。40から46、7まではよくやってて、ガンバの監督になってからあまり出来なくなって、それからこういう仕事 (議員) でしょ。元もと練習しないんですが、ゴルフをする機会が減って、当たるかなという不安が先に立つとボ

治・そしてゴルフに熱い思い…。

再刊されることになったオリンピックゴルフ倶楽部会報の巻頭を飾って世界のストライカーで、参議院議員の釜本邦茂さんにご登場ねがった。釜本さんと言えばメキシコ五輪での雄姿が思い出される。日本の銅メダル獲得の原動力になり「世界のカマモト」と称賛された。ヤンマーで活躍の後、ガンバ大阪の初代監督から参議院議員。現在、自民党副幹事長など多くの政治的役職のほか、日本サッカー協会副会長として強化部門の最高責任者でもある。メンバーであるオリンピックゴルフ倶楽部ではエチケット委員も務め、サッカー同様に豪快なゴルフを楽しんでいらっしやる。サッカー、政治、そしてゴルフと、熱い思いを語ってもらった。



ールを上からじゃなく、横から見るようになるんです。だからどうしても」

五嶋「立派な足（太もも）ですからスライスするとは考えられないんですが」

釜本「ゴルフというのはどうやって打てばいいのかは、良く分かるんです。（本に）書いてあるのを見るとね」

五嶋「ええ、分かります」

釜本「スライスというのは体が逃げたら出るでしょ。ところがサッカーは体を逃がさないとボールを蹴られない。真っすぐ来るのを真っすぐ蹴るのはいいけど、横から来るボールは軸足の左足を

ぐっと踏み込んだら、右足は上がっているわけで、蹴る態勢にはなっているが、ボールはまだ来ていない。来たら軸足を左へ逃がしながら蹴る。ゴルフで左足が逃げるのもサッカーの習性ですね」

五嶋「ああ、野球でも一緒です。腰をこうまわして打っていきますから。野球選手は全部、最初はスライスします」

釜本「そうですね。左足を止めとかないかんのが分かってても、どうしても逃げるんですね」

五嶋「それでもハーフ40前後で回られるとか」

釜本「いやあ、もう、今はそんな。10年ぐらい前は本気でシングルになってやろうかと思ってましたが、もうだめですね」

五嶋「私がシングルになったのは50を超えてからです」

釜本「そりゃ、だいぶん練習してらっしゃる」

五嶋「国会議員には上手な方がいらっしゃると思いますが」

釜本「ええ、たくさんおられますよ」

五嶋「どんな議員の方々とよく回られますか」

釜本「我々の、いわゆる派閥の森（喜朗首相）先生なんかとはよく。でも年に1回くらいですか。森先生は楽しく、にぎやかな、気持ちのいいプレーヤーですよ」

五嶋「杉原（輝雄）プロとはご懇意だとか」

釜本「ええ、宮本省三さんとか奥村（市衛門）さん



釜本邦茂氏 略歴

- 1944(昭和19)年 京都市太秦生まれ。56歳。山城高から早大。関東大学リーグ史上初の4年連続得点王。在学中から日本代表としても活躍。早大2年で東京五輪に出場。
- 1967(昭和42)年 ヤンマーディーゼル（現セレッソ大阪）に入る。
- 1968(昭和43)年 メキシコ五輪出場。サッカー日本リーグでは優勝4回、準優勝4回。得点王7回。天皇杯の優勝3回。
- 1984(昭和59)年 引退試合の行われた国立競技場には6万2千人が集まった。
- 1992(平成4)年 ガンバ大阪の監督に就任。
- 1995(平成7)年 参議院議員に。



大嶋（正春）さんなど、関西の古いプロの方とはいまでも親しくさせてもらってます」

五嶋「オリンピックに入られたのはいつごろですか」

釜本「出来た当初からです」

五嶋「ここでは、どういう方とご一緒によく回られますか」

釜本「大体、家族で行ったり、友達とですね。気楽に好き放題できるから（笑い）」

五嶋「オリンピックゴルフ倶楽部へのご注文等あれば」

釜本「非常にゴルフがやりやすい、いいゴルフ場です。それだけに皆がマナーを守ってプレーしなければいけないと、思いますね」

五嶋「ええ」

釜本「サッカーを長年やってきたから分かるんですが、昔は芝のグラウンドは東京の国立ぐらいしかなかった。もちろん、練習場には芝なんかなかった。試合で穴になったら自分で埋め戻しておいたもんです」

五嶋「そういう時代でしたね」

釜本「だからこそ皆で芝生を大事にしなきゃいけないと思います。ゴルフ場がコースの管理をしっかりやるのと同じようにプレーヤーも、このくらいの（手のひら）ターフが転がっていたら、埋め戻しておくとか、雑草に気が付いたら抜くとか、心してやるような習慣をつけたいですね」

五嶋「まったくです。ところで、去年は何回ぐらいオリンピックでプレーされました」

釜本「5、6回ですかね。17番のね、池を真っすぐに越えるのをいつも楽しみにしてるんですよ」

五嶋「へーっ」

釜本「池のちょっと左側のね、木をめがけて打つんです」

五嶋「そりゃ、すごい」

釜本「スライサーだから、池には入らない（笑い）」

五嶋「名物ホールですからね」

釜本「いいホールですね」

五嶋「ぜひ一度一緒に」

あとがき

いかにもスポーツマンらしい気持ちのいい方で、楽しい対談になりました。サッカー一筋、少年たちのあこがれの人から、国政の場への鮮やかな転身が物語るように、頭の切れる誠実な方という印象を強く持ちました。豪快で、ユーモアたっぷりの話しぶりの中に、何事にも真剣に取り組む姿勢がうかがえた。今後のご活躍を心から期待します。



聞き手：五嶋雅徳

フェローシップ委員長
読売新聞大阪本社 常務取締役

大川 清のひとりごと 「対戦相手との乾杯」



1981年 世界シニアゴルフ選手権競技で優勝 右から3人目は大会会長 右端が、準優勝のホーガン氏

気がつけばゴルフを始めて40年以上になるが、その間さまざまな国を訪れ、それぞれに特色を持ったコースでラウンドし、いろいろなゴルファー達と接する機会を得た。そして、その人々が本当にゴルフを心から愛し、又クラブライフを正に家族ぐるみで楽しんでいるのを目のあたりにして、少なからぬ驚きと羨ましさを感じたものである。

元来日本でゴルフといえば一般的には男だけの世界で、家庭とはあまり縁のない感が強かったので、海外のゴルフ場の実にアットホームな雰囲気を受けてみて大変新鮮な印象を受けました。と同時に、日本でもそういう家庭的な温かい感じで楽しめるコースがあればなあと思いました。その中でも特に思い出深い話を御紹介してみましよう。

私は過去長年にわたり、世界各地で開催される“世界アマチュアゴルフ選手権競技”に選手として参加していましたが、1981年55歳になり、アメリカコロラド州のブロードムーアゴルフクラブに於いて行われる“世界シニアゴルフ選手権競技”に出場し、運良く優勝する事が出来ました。その競技は、最初の2日間の36ホールが世界30数ヶ国のそれぞれの代表選手4名が出場して行なう、国の対抗戦であると同時に個人戦の予選にもなっていて、参加選手は320名余りにも上る大会である。団体戦は各国のチームのネットスコアの合計で順位が争われ、個人戦については各選手のグロススコアをもって32名が選出され、決勝戦に於いてスクラッチのマッチ・プレーにより5日間を勝ち抜いていくという方法で進められていく。従って、毎日対戦相手が変わります。そして驚くべきことに、どの相手の場合でも、勝敗がつき二人が握手をしたとたんに相手の家族、友人、選手の方々数十名が二人の傍に寄って来て、先ず奥様が紹介され、奥様は握手を求め勝利を讃え、皆次々に「コングラッチュレーションズ！どうぞ優勝して下さい。」と声援を下さる。その所作の余りにも自然で清々しいのに正直言って一瞬ためらい驚いた。しかし、私もすぐさまその笑顔の挨拶に答え、「どうも有難とうございます。今日は私の方が少し運が良かっただけです。よろしければ皆さんクラブハウスで一杯いかがですか？」と申し出ると、少しも悪びれずその勧めに応じ全員が各自好きな飲み物を注文して、グラスを手に祝杯をあげ飲み終えると礼を言い一斉に席を離れていきました。彼等が去った後、私は言いようのない心地よい感銘を受けている自分に気がきました。その対戦相手の家族や友人の友愛溢れ、かつ紳士的な振る舞いに改めて西洋人の大らかでありながら律義な一面に触れて感動したのです。また、国境を越えてそれを感じる事が出来るのも、ゴルフというスポーツの醍醐味の一つであり素晴らしさであると再認識させられました。

それ以来ゴルフ場の設立計画や運営についてもそれらの経験をふまえて、ゴルフのみならず人間味を味わえる要素を盛り込んで進めているつもりです。プールやテニスコートを造ったのもその思いからきています。というわけで、私はオリンピックゴルフ倶楽部もメンバー同士仲が良く、家族ぐるみでゴルフを通じて楽しくおつき合い出来る場所であって欲しいと、いつも心より願っております。